

2008. 6. 24 文化研究講座

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団
Dresdner Philharmonie

program

1. カール・マリア・フォン・ヴェーバー : Carl Maria von Weber

魔弾の射手 Der Freischütz

2. フェリックス・メンデルスゾーン : Jakob Ludwig Felix Mendelssohn

ヴァイオリン協奏曲 木短調 作品64

————— 休 憩 —————

3. ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン : Ludwig van Beethoven

交響曲第5番ハ短調作品67 運命

昭和女子大学創立者記念講堂

‡ Program Notes ‡

1 歌劇「魔弾の射手 (まだんのしゃしゅ)」序曲 C. M. v. ウェーバー (1786-1826)

ウェーバーの代表作「魔弾の射手」は、ドイツ・ロマン派歌劇最初の成功作として知られる。物語はドイツの古い伝説に基づき、恋人と結婚するためには射撃競技に勝たなければならない狩人マックスが、悪魔に魂を売って手に入れた魔法の弾を使ってしまい、その不正が露見し追放を命じられるというもの。オペラ全曲中、有名な「狩人の合唱」とならんで広く親しまれているこの序曲は、序奏付のソナタ形式により、劇中の音楽を配しながら物語全体を集約する形で展開する。4本のホルンによって奏でられる序奏部の主題は、「秋の夜半」として特に広く知られている。

2 ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 Op. 64 F. メンデルスゾーン (1809-1847)

ベートーヴェン、ブラームスの作品と並ぶ「三大ヴァイオリン協奏曲」の一曲として名高いこの作品は、1844年、メンデルスゾーン35歳の時に作曲された。この年メンデルスゾーンは、ベートーヴェンの〈ヴァイオリン協奏曲〉の初演以来38年ぶりの再演を指揮して、その真価を世に知らしめたが、まさに生まれるべくして生まれたといえるのがこの名作である。ロマン的な情感と古典的な形式美がすぐれたプロポーションのもとに融合し、また、華麗なテクニックをちりばめた独奏パートの魅力にかけても完璧なまでの冴えを見せるこの協奏曲は、メンデルスゾーンが常任指揮者の任にあったライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスター、フェルディナント・ダヴィドの協力を得て完成され、彼に献呈された。曲は全3楽章からなるが、各楽章は切れ目なく続けて演奏されるよう指示されている。これは、各楽章の流動性を中断させないための配慮であり、メンデルスゾーンは他にも、当時はまだ奏者に任されることが一般的だったカデンツァをすべて作曲するなど、作品の細部にまで完璧さを求めている。

第1楽章：アレグロ・モルト・アツパッシオナート（ソナタ形式）。

第2楽章：アンダンテ。

第3楽章：アレグレット・ノン・トロppo（序奏）－アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ（主部）。

3 交響曲第5番 ハ短調 Op. 67「運命」 L. v. ベートーヴェン (1770-1827)

ベートーヴェンの代名詞といえるほどに広く愛好されているこの交響曲、「運命」のタイトルで親しまれているが、実はこのタイトルが日本以外の国で使われることは少ない。由来は、第1楽章冒頭の4つの音符についてベートーヴェンが、弟子のシントラーに「運命はこのように扉をたたく」と語ったという有名な逸話による。耳の病を強靱な生への意志で克服した作曲家の不屈の魂を象徴するようなタイトルである。一方、純粋に音楽的に見ても、この作品が円熟期のベートーヴェンならではの特質を備えた傑作であるのは間違いない。4音の動機を徹底的に展開するすぐれた造形性や様々な大胆な試みをはじめ、ベートーヴェンは「交響曲」という形式的な発想だけにとどまらない、聴き手の心にダイレクトに訴えるような音楽を書いた。この傑作には、そうしたベートーヴェン独自の斬新な音楽的要素が、見事に凝縮された形で結晶しているのである。

第1楽章アレグロ・コン・ブリオ（ソナタ形式）。

第2楽章アンダンテ・コン・モート（変奏曲形式）。

第3楽章アレグロ（スケルツォ楽章）。

第4楽章アレグロ。

柿沼 唯 Yui Kakinuma (作曲家)

● ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団 Dresdner Philharmonie

2005年、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団は創設135周年を迎えた。常に優れた首席指揮者を擁し、世界的なソリストや客演指揮者と共演を重ねてきた。現在の首席指揮者ラファエル・ブリューベック・デ・ブルゴスが、2004年に3週間に及ぶアメリカ・ツアーを行った際には、ニューヨークの批評家たちから「世界有数のエリート・オーケストラ」と大絶賛された。これは外国のオーケストラがアメリカで受けた批評としては、異例とも言える高い評価であった。

[草創期] ドレスデン・フィルは1870年に創設されたが、この年は奇しくも、ドレスデン市初の市民コンサートホール「ゲヴェルベハウス・ザール」が公式にオープンした年であった。貴族階級のためのシュターツカペレ・ドレスデン(ドレスデン国立歌劇場管弦楽団)とは異なり、ドレスデン・フィルは市民の文化から生まれたオーケストラである。

ドレスデン・フィルのルーツは、市民アンサンブル「ラーツ・ムジーク」結成の450年前に遡る。官廷や貴族階級の影響を受けることなく19世紀後半まで活発な活動を続けが、当初より、定期的に演奏会を開く本拠地が無かった。

しかし1870年、多目的ホール「ゲヴェルベハウス・ザール」が誕生、第二次大戦で破壊されるまで、同ホールはドレスデン・フィルの演奏会場として利用された。「ゲヴェルベハウス・カペレ」から1909年、アメリカ・ツアーを行った際に、「ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団」という名称を用いた。(ちなみにドレスデン・フィルは、アメリカ・ツアーを行ったドイツ最初のオーケストラ)1915年からこの現名称が正式に用いられるようになった。1969年に市のダウンタウンに「文化宮殿」が完成してからは、ここを活動の拠点とした。

[名指揮者たちのもとで世界的な名声を獲得] 1930年代の世界的な名声は名指揮者パウル・ファン・ケンペンのリーダーシップに因るところが大きい。この成功は巨匠たちを惹き付け、アルトゥール・ニキシュ、ヘルマン・アーベントロート、ハンス・クナッパーツブッシュ、フリッツ・ブッシュ、エーリッヒ・クライバー、ヨーゼフ・カイルベルトなど、そうそうたる面々が客演した。また第二次世界大戦後の再建については、当時の首席指揮者ハインツ・ボンガルツの名が、その他の特筆すべき首席指揮者としては、クルト・マズアの名が挙げられる。

[1990年、東西ドイツの統一] 1990年、東西ドイツが統一されると、ドレスデン・フィルにも新しい時代が訪れた。旧東ドイツの体制下では多くの制約があったにもかかわらず、ドレスデン・フィルの芸術的レベルは向上を続け、卓越した芸術性ゆえに旧体制下においても、世界各地で数多くのコンサート・ツアーを行い得たが、外貨の不足から国際レベルの芸術的交流は難しかった。潜在能力を発揮したのは、東西ドイツ統一後のことであった。

[ミシェル・ブラッソンからマレク・ヤノフスキへ] 1994/95年シーズンには、世界的名声を誇るミシェル・ブラッソンが首席指揮者に就任。フランスの主要作曲家の作品が重点的に取り上げられるようになった。2001年からは名匠マレク・ヤノフスキが首席指揮者の座を引き継いだ。ドイツの伝統文化に造詣が深く、歓迎された出来事であった。

[ラファエル・ブリューベック・デ・ブルゴスを迎えて] 2003/04年シーズンにはラファエル・ブリューベック・デ・ブルゴスが首席客演指揮者として招かれ、翌年首席指揮者に就任した。彼が特に力を注いでいるのは、オーケストラが長い年月をかけて培ってきたドイツ音楽における高い芸術性を世界に紹介することである。そのレパートリーに現われるドイツ的な響きは「ザクセンの音」とまで呼ばれ、これこそドレスデン・フィルがその世界的名声を勝ち得た所以でもある。毎年世界各地へのツアーを行い2004年スペイン・ツアーでは「史上最高のドイツ・オーケストラのひとつ」と絶賛された。アメリカ・ツアー、2005年の南米ツアーも大成功を収めた。

